様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １５ 日現在

機関番号：５０１０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０２９１２

研究課題名（和文）小・中･高の英語の教科書・教材におけるスピーキング活動のタスク性からの分析

研究課題名（英文）The Analysis of Speaking Activities of English Textbooks in Japan using Task-likeness

研究代表者
山下　純一（Yamashita, Junichi）

函館工業高等専門学校・一般人文系・准教授

研究者番号：２０５５２０８７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：英語の教科書に掲載されているスピーキング活動をタスク性の観点から分析した。その結果，全体的にタスク性が高い活動が多く掲載され，且つ，学年が上がるにつれてタスク性が上がっていく特徴が見られた教科書があった一方で，半数近くの教科書ではほとんどの活動でタスク性が低く，タスクを意識された活動が多くないことがわかった。
また，教科書の活動をそのまま用いた場合とタスク性を高めた活動を用いた場合の授業を比較したところ，タスク性を高めた活動を行った方が生徒の意見や考えを加えた発話や英語の使用が多くなることが示されたことから，スピーキング活動ではタスク性の観点も重要だと言うことが示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究成果から，英語教科書に掲載されているスピーキング活動がタスク性の観点からばらつきがあることがわかった。しかしながら，タスク性が高い活動が生徒の意見や考えを英語で述べる機会を増やすことも本研究成果からわかったことから，授業でスピーキング活動を実施する際には，より生徒の英語での発話を促し，教育効果を高めていくためにも，タスク性の観点を取り入れて活動を工夫することが大切だということを示すことができた。

研究成果の概要（英文）：We investigated how speaking activities of English textbooks differ in terms of task-likeness. The results showed that one textbook was rated the most task-likely of all, and it became more task-likely as the grade goes up. Some textbooks were, moreover, rated low task-likely, and this indicated that task-likeness was not considered when speaking activities of some textbooks were made.
Compared between classes conducted a speaking activity of an English textbook and a speaking task we arranged, students expressed more opinion in English while the speaking task than while the speaking activity of the English textbook. Moreover, students had chance to speak English longer while the speaking task than while the speaking activity of the English textbook. This results indicated that task-likeness was important when we conducted speaking activities.

研究分野：英語教育

キーワード：スピーキングタスク　コミュニケーションタスク

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

○研究の学術的背景・研究の経緯

平成２５年に文部科学省から発表されたグローバル化に対応した英語教育改革実施計画によると，グローバル化に対応した新たな英語教育の在り方で，英語によるコミュニケーション能力を確実に養うことを目標の一つとしている。その実現のために必要な項目の一つとして，指導用教材の開発がある。一言で教材開発と言っても，４技能（話す・聞く・読む・書く）といった育成する技能の観点や教科書や ICT など教材自体の種類の観点など様々な観点が必要となってくる。研究開始当時までの研究では，４技能の中の話す力，いわゆるスピーキング力の育成に重点を置き，また，学校教育を受けている児童・生徒であれば誰しもがほぼ手にするであろう教科書に掲載されているスピーキング活動に着目し，言語習得の観点からスピーキング力育成に有効かどうかの指標となるタスク性の観点[1)]を用いて分析を行ってきた。その結果，教科書によってタスク性にばらつきがあり，効果的な指導を行うために工夫が必要になってくる活動も多かった。つまり，せっかく多くのスピーキング活動が教科書に掲載され，授業の中でそれらの活動を用いられても，スピーキング力の育成には効果が薄いものとなってしまっている。また，小学校外国語教材と中学校英語教科書には掲載されている活動のつながりが見られているが，中学校英語教科書と高等学校英語教科書の活動との間には活動の内容やつながりが見られず，教材レベルでは小学校から高等学校の各段階を通じた指導が行いづらいものとなっていることもわかってきていた（山下他，2015）。

２．研究の目的

英語教科書に掲載されているスピーキング活動をタスク性の観点から分析し，その結果を基にしてスピーキング力育成に有効な動教材の開発，それらを用いた活動の実践，そして，そこから見えてくる課題を明らかにする。

３．研究の方法

本研究では，次の２点に重点を置いて研究を行った。

(1)分析対象を 6 社から出版されている中学校英語教科書（A社，B社，C社，D社，E社，F社とする）とする。臼田他(2009)で開発した下記のタスク性の観点を用いて 5 件法でそれぞれの教科書に掲載されているスピーキング活動のタスク性を 9 名の分析者で分析をする。

1. Interaction(Group work)･･･ペアやグループの活動としてふさわしいか。
2. Meaning･･･第一に意味の理解や伝達に焦点を当てているか。
3. Outcome･･･活動の終わりに結果として残るものがあったり、結果が行動として現れたりしているか。
4. Completion(Explicitness) ･･･活動の目標(goal)・完了が何かが明示されているか。
5. Authenticity･･･実生活の活動と関係があるか。

(2)タスク性を高めたスピーキング活動の開発を行い，実際の教育現場でスピーキング活動を実践することでそこから見えてくる課題を明らかにする。

４．研究成果

(1) 教科書の分析結果について

6 社の中学校英語教科書を分析した結果，各観点の合計で見るとタスク性はA，B，F社がC，D，E社と比べて高い傾向が見られた。つまり，A，B，F社の教科書はタスク性が高いスピーキング活動を多く掲載し，C，D，E社の教科書はタスク性が低い活動が多いということが示された。また，観点別で見てみると，Interaction の項目ではA，B，F社が高い傾向があり，C，D，E社は低い傾向があった。Meaning の項目では，A社が最も高く，B，F社が高い傾向，C，E社は低い傾向があり，D社が最も低かった。Outcome では，A，B，F社が高い傾向があり，C社はやや高い傾向，D，E社は低い傾向が見られた。Completion では，A，B，F社が高い傾向があり，C，D，E社は低い傾向があった。Authenticity では，A，B，F社が高い傾向があり，C，D，E社はやや高い傾向があった。このように，タスク性の観点から見ると各教科書によってスピーキング活動にばらつきが見られることがわかった。

タスク性の観点の合計から一番高い結果を示したA社の教科書を細かく見ていくと，他の教科書にはない特徴が見られた。それは，学年が上がるにつれてタスク性が高くなっていることである。中学校英語教科書のスピーキング活動はペアになっておこなうが結果的にドリル活動となるものが多く，学年が上がるに連れてペア活動から個人活動にシフトしていく傾向が見られ，その結果，タスク性が高いスピーキング活動が減っていく傾向がある。A社も同様の傾向は見られたが，その反面，１年生から掲載されているタスク性の高いスピーキング活動は減らすことなく掲載誌続けている。その結果，A社は他の教科書と違って全体的にスピーキング活動のタスク性が高いという結果が得られたと考えられる。

また，反対にタスク性が低かったC，D，E社にも特徴が見られた。C社は１年生の教科書にスピーキング活動が一番多かったが，それらの多くの活動が「例にならって～」という活動となっており全体的にタスク性を下げる原因となっていた。D社，E社は同じような傾向が見られ，タスク性が低くなるドリル活動の後にそれらを発展させた活動を行うという構成になっている

ことから結果的にタスク性が高い活動が含まれていたとしても低い活動が平均化され，全体的にタスク性が低くなってしまっていた。また，全体的に Outcome の観点がほとんど見られなかったのもタスク性が低くなった理由の一つと考えられる。

これらの結果から，タスク性の観点から見ると中学校英語教科書に掲載されているスピーキング活動は教科書によって様々であり，タスク性が高い活動が多い教科書と少ない教科書があることがわかった。また，6 社の教科書の中でもタスク性が高い 3 社と低い 3 社の二極化がみられたことから，使用する教科書によってスピーキング力育成の効果にばらつきが出てしまう可能性が示唆される。しかしながら，必ずしもタスク性が高いから良い活動，スピーキング力育成に適した活動というというわけではない。教科書の内容や組立によっては活動が複雑になってしまったり，学習者の学力の観点から使いづらいものになってしまったりしてしまう可能性もある。そういった点を踏まえつつも，教科書によるスピーキング活動の質の差が表れないようにしていく必要があるのではないだろうか。

(2)タスク性の観点を考慮したスピーキング活動を用いた授業実践について

本研究では中学校の授業に絞って授業実践を行った。ある中学校の英語授業の進度に合わせ，教科書の内容に沿った形でタスク性の観点を考慮したスピーキング活動の作成に当たった。今回はあるレッスンで学習する“What ～ do you like?”の文法項に合わせ「ベスト給食を決めよう」というタイトルで好きな給食のランキングをグループで作成していくという活動を作成した。また，タスク性の観点を取り入れた活動を最大限に生かすために“Task Based Language Teaching (TBLT)”の理論を用いて授業を組み立てた。授業を実践した結果，授業者からは，タスク性が高いスピーキング活動に対する好意的な意見が得られた。

・生徒たちが楽しんで活動していた。
・生徒の英語発話量がいつもより多く，積極的に英語使用をしていた。
・事前に文法や単語を教え込まなくても活動が行えた。
・生徒の英語で言いたいけど言えないという感情が実際に英語で言えたときに喜びにつながり，表現の定着につながるのではないだろうか。

しかしながら，下記の否定的な感想も得られた。

・少し活動が難しかったかもしれない。
・実際の活動に時間がかかりすぎた。
・準備が大変のため，毎回の授業で実施するのはため難しいため，教科書に沿ったタスク性の観点を考慮した活動集があると続けるのは難しい。

今回の結果から，授業者の感想からタスク性の観点を考慮したスピーキング活動用いて TBLT を実践するメリットが見られた。その一つは，学習者は活動に必要な文法事項や単語を教え込まれなくても積極的に英語の発話に取り組むことができるという点である。これまでのスピーキング活動の多くは，ある文法項目や単語を教え込み，それを踏まえた上で活動に取り組むという流れになっているため，活動で用いる表現をしっかり教えなければうまく活動をしていけないのではないかという不安が教員の中に生じることがある。しかし，タスク性の観点を取り入れた場合，事前に文法や語彙を教え込まない，また例文を全く示さない状態から活動に取り組むことから，学習者が自ら考え，試行錯誤しながらコミュニケーションを図ろうというより現実的なシチュエーションに近い状況下で活動を行うことができる。つまり，実際に授業外で英語を話す場面に直面したときにどのように対応していくかを合わせて学ぶことができるということである。二つ目は文法事項の定着についてである。タスク性の高い活動を取り入れるのに躊躇してしまう大きな理由の一つとしてターゲットとなっている文法（本研究では“What ～ do you like?”）を教え込まなければ定着しないのではないかという不安がある。しかし，今回のスピーキング活動でターゲットとなっている文法項目の“What ～ do you like?”の定着を確認するために，活動を実施した直後とその１ヶ月半後にテストを行ったところ，直後よりも１ヶ月半後の方が有意に高い結果(t (39) = -2.28, p = .03, d = .31)が得られ，今回の活動で扱った内容が定着している可能性が得られた（表１３）。そのことからスピーキング活動のタスク性を高め TBLT に基づいて実施しても文法項目の定着が図られることが示唆された。

表１　活動の事後・遅延テスト結果

	M	*SD*
事後（授業後）	7.20	2.91
遅延（1ヶ月半後）	8.10*	2.86

しかしながら，スピーキング活動を行うに当たり，学習者の学力を考慮して活動をその都度，作成しなければならなかったり，そのための準備に時間を要したりと実施する教員の負担が非常に大きいため頻繁に行うことが難しいといった，授業を実施する側の大きな課題が見られた。

(3)まとめ

本研究では，タスク性という観点から教科書に掲載されているスピーキング活動の分析と授業実践を行った。教科書に掲載されているスピーキング活動は教科書によってタスク性の差が大き

くばらつきがあった。一方で中学校の授業で TBLT 理論に基づきタスク性を高めたスピーキング活動を実施することにより,学習者の英語発話量を増やし英語を積極的に使う姿勢を養うことができ，また文法項目を定着させることができる可能性を示すことができた。これらのことから教科書のスピーキング活動の質を表す指標としてタスク性の観点が一つの有効な指標になり,この指標を使って各教科書のスピーキング活動の質を揃えていくことが可能となるだろう。そうすることで，多くの教員がスピーキング力育成のための授業の一つとして TBLT を用いた授業を実施することが可能になるのではないだろうか。しかしながら，今後の課題として，次の 2 点が挙げられる。一つ目は，タスク性の観点を指標としたとき，どのくらいのタスク性の高さが良いかといった点はまだ解明されていない点である。二つ目は，今回は活動作成から取り組んだ可能性もあるが，授業を行った教員から「準備が大変だった」という意見があったことから，TBLT を実践するに当たり教員負担が大きい可能性もあるという点である。今後，これらの課題に取り組んで行きたい。

＜脚注＞

１）日本の英語教育でも“Task Based Language Teaching (TBLT)”という言葉で浸透しているように，いわゆるタスク活動は言語習得に有効な手段の一つである。Skehan(1998)と Willis&Willis(2007)のタスクの考え方を参考にして本研究チームで作成した５つの項目を用いている(臼田他，2009)。

＜参考文献＞

臼田悦之・志村昭暢・横山吉樹・山下純一・中村洋.(2009). 教科書におけるスピーキング活動のタスク性に関する分析―中学校英語教科書の場合―. HELES Journal, IX, 17-32

Skehan, P. (1998). A cognitive approach to language learning. Oxford: Oxford University Press.

文部科学省(2014). 「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」

山下純一・志村昭暢・萬谷隆一・横山　吉樹・臼田悦之・竹内典彦・中村洋・河上昌志・照山秀一(2015). 小学校・中学校・高等学校の英語教科書・教材のタスク性から見たコミュニケーション活動の比較. 全国英語教育学会第４１回熊本研究大会　口頭発表資料

Willis, D & Willis, J (2007) Doing Task-based Teaching. Oxford; Oxford University Press

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計１件）

①山下純一・志村昭暢・臼田悦之・竹内典彦・河上昌志・照山秀一・中村洋・小山友花里・沢谷佑輔・横山吉樹・萬谷隆一 (2017).『タスク性から見た中学校頴悟教科書のコミュニケーション活動についてー教科書間の比較とタスク性に差が出る要因ー』, *HELES JOURNAL 16*, 19-34.

〔学会発表〕（計 6 件）

①志村 昭暢, 小山 友花里, 臼田 悦之, 山下 純一, 中村 洋, 酒井優子, 河上 昌志, 照山 秀一.(2018).『英語教育における実践研究の方法』, 北海道英語教育学会第１９回研究大会.

②志村 昭暢, 小山 友花里, 臼田 悦之, 山下 純一, 中村 洋, 酒井 優子, 竹内 典彦, 河上 昌志, 萬谷 隆一, 照山 秀一.(2018).『中学校教科書に対応した コミュニケーションタスクの開発と検証』, 全国英語教育学会第 44 回京都研究大会.

③山下 純一, 竹内　典彦, 酒井　優子, 中村　洋, 河上　昌志, 小山　友花里, 照山　秀一, 臼田　悦之 , 横山 吉樹, 萬谷 隆一.(2017). 『中学校英語教科書のコミュニ ケーション活動の分析―タスク性とタスク分類項目の視点から―』, 全国英語教育学会第 43 回島根研究大会.

④山下純一, 小山友花里, 臼田悦之, 志村昭暢, 横山吉樹.(2017).『タスク性を取り入れたスピーキング活動の実践―中学校・高校の接続の視点から―』, 全国英語教育学会第 43 回島根研究大会.

⑤山下純一, 志村昭暢, 臼田悦之, 竹内典彦, 河上昌志, 照山秀一, 中村洋, 小山友花里, 沢谷佑輔.(2016).『英語教科書のスピーキング活動をより実生活の場面につなげる工夫 - タスク性分析の視点から』, 第１７回北海道英語教育学会研究大会.

⑥山下純一, 志村昭暢, 臼田悦之, 竹内典彦, 河上昌志, 照山秀一, 中村洋, 小山友花里, 沢谷佑輔.(2016).『中学校英語教科書のタスク性から見たコミュニケーション活動の分析―平成２８年度から使用開始された教科書について―』第 42 回全国英語教育学会埼玉研究大会.

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：志村昭暢
ローマ字氏名：Shimura Akinobu
所属研究機関名：北海道教育大学
部局名：教育学部
職名：准教授
研究者番号（8 桁）：60735405

研究分担者氏名：臼田悦之
ローマ字氏名：Usuda Yoshiyuki
所属研究機関名：函館工業高等専門学校
部局名：一般系
職名：教授
研究者番号（8 桁）：00413708

研究分担者氏名：竹内典彦
ローマ字氏名：Takeuchi Norihiko
所属研究機関名：北海道情報大学
部局名：経営情報学部
職名：教授
研究者番号（8 桁）：20364284

研究分担者氏名：横山吉樹
ローマ字氏名：Yokoyama Yoshiki
所属研究機関名：北海道教育大学
部局名：教育学部
職名：教授
研究者番号（8 桁）：70254711

研究分担者氏名：萬谷隆一
ローマ字氏名：Yorozuya Ryuichi
所属研究機関名：北海道教育大学
部局名：教育学部
職名：教授
研究者番号（8 桁）：20158546

(2)研究協力者
研究協力者氏名：小山友花里

ローマ字氏名：Koyama Yukari
研究協力者氏名：中村洋
ローマ字氏名：Nakamura Hiroshi
研究協力者氏名：河上昌志
ローマ字氏名：Kawakami Masashi
研究協力者氏名：照山秀一
ローマ字氏名：Teruyama Shuichi

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。